

## 水の不思議「水と氷で遊ぶ」

学校法人 菅原学園 江戸川双葉幼稚園（東京都江戸川区）

### 【活動の意義】

雨上がりの園庭で、「火事だ」と、3歳児が叫ぶ。ぎょっとした私たちの目に写ったのは、プレイエリアの丸太から立ち上る湯気。「きれい！」と、釘付けになってしまった4歳児の視線を追うと、真正面に張られた見事な蜘蛛の巣に水滴がついて、日の光にダイヤモンドのように輝いていた。カタツムリを探しに出る子、美しくキラキラ光る水滴に魅せられている子。雨上がりの園庭は宝石箱のようだ。水たまりでは、泥んこ遊びが始まり、園庭の雨水の流れに沿ってダム作り、川作りが展開する。「水はこっちから流れているんだ」などと言いながら、水は高い方から低い方へと流れることを知ってゆく。そして、水が重いことも、力強いことも遊びの中で体得してゆく。水鉄砲や、噴水作り、噴水遊び、シャワー、そして、虹作り(太陽の不思議)を楽しむ。そして、プール遊びでは、バケツリレーをして、プールに水を入れる。またかき氷を食べて、氷がどんどん融けてしまうのを実感する。

【主な絵本】『しずくのぼうけん』『みず』『かわ』『かわはながれる』『ゆきどけみず』『ふゆのあらし』

### 【実践と思索】

《氷ってどうやってできるんだろう？(昨年度の4歳児での実践)》

「氷って、冷蔵庫で作るんだ」と言う子どもたちが多く、自然の中の氷をあまりに知らない子が多い。そこで、身近なところで、氷の張るのを見せたいと願った。ある日、「氷って、どうやってできるのかなあ」と、投げかけてみた。氷は、「冷蔵庫」「冷凍庫」にあると答える子どもたち。そんな中、KちゃんやSちゃんが「お外で、水が凍って氷になる」と答える。それで、「みんなで、外で氷を作ろう」と呼びかけると、みんなの目はまん丸。それぞれに自分の好きな容器を選んで、水を入れ、園庭へ。どこに置こうか、それぞれに考えている。「そこ、お日様当たるから、溶けちゃうよ」などと言いながら、日の当たらない、寒そうなところを探している。20分くらい経った頃、Rちゃんが「先生、氷できたか見てくる」と行って走り去り、「先生、まだだった」と。

翌日朝登園するなり、自分の容器を見に行き、みな、「できてない」とがっかり。凍るほどの気温にならなかった。天気予報からも、しばらくはダメかと思われたが、子どもたちは来る日も来る日も容器を出す。そうこうするうちに、子どもたちの興味も期待も薄らいでゆく。

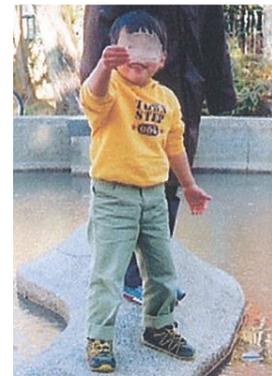
2月8日、朝、とても寒く、もしやと期待して、森公園の池を見に行く。「おー、やったー」と、幼稚園の氷に期待したが、こちらはダメ。それで、日曜日にもかかわらずお近くの何人かのお宅に連絡すると、森公園に氷を見にR君とNちゃんが来て、大喜び。この日の氷は、2.5ミリくらいの薄い氷だったが、池一面に張りつめ、木の根本には、1センチくらいの霜柱も立っていた。

明けて月曜日。この日も氷は張っていなかった。登園したNちゃんは、「昨日ね、森公園でね、氷できててね」と目を丸くして報告し始める。

「氷は、堅くて、冷たくて、大きかった。池全部氷になっていたの」と、興奮して話す。昨日の体験を二人で交互に補いながら、みんなに話して聞かせる。さらに、「家の裏は、とっても寒いから、氷できると思うの。だから、ママと一緒に、水入れて置いてあるんだよ」。この二人の報告を聞いて、一度しぼみかけた氷への興味が再燃。「みんなにも見せたかったけど、氷も霜柱も、溶けちゃうの」と、申し訳なさそうに言うNちゃん。そして、みんなの氷作り実験が再開。

これまで以上に、いくらかでも寒いところはないかと、隅々にまで容器を置いて歩く。

翌日火曜日、朝一番で森公園の池を見に行くと、うっすらと一部に氷が張っている。しかし、園庭の水は、水のまま。そこで、子どもたちを迎える前に、保育者は大急ぎで、発泡スチロールの箱を持って森公園に氷を取りに行った。朝、足早にNちゃんがバケツを持って嬉しそうに登園した。そのバケツには、森公園の池の水が入っていて、みんなに見せながら話している。氷は薄くて、触ると、ぱりっと割れてしまう。ここなら寒いと自信を持って置いた容器、どれも、園庭では凍らなかった。Nちゃんの持ってきてくれた氷を見たり触れたりした後、全員が揃ったところで、保育者が森公園から取ってきた発泡スチロール箱入りの氷を披露。小さい氷は、



くっつき合っ、大きな氷の塊になっていた。これを慎重に持ち上げると、「わあー」と歓声が上がった。自然のものなので、よく見ると、砂が入っていたり、落ち葉や枝がくっついていたり、そんな自然の氷をじっと観察している。「冷たすぎる」「ガラスみたい」「おもしろい」「つるつる」「気持ちいい」と、触った感触を口々に言う子どもたち。「僕も、池に行っ、氷見たい」などと言う。子どもたち同様、保育者自身も氷ができるか、わくわくし通しだった。

### 【反省・考察・評価】

スキーなどの経験のある子は、自然の中の氷を知っていたが、都市の温暖化で、霜が降りることも、霜柱も、そして氷も知らない。「氷点下」という言葉を実感するためにも、一度は自然に凍るのを体験させたかった。が、ちょっと足を延ばすことで、池の氷を見たり、触ったり、枝や枯れ葉が氷の中に閉じこめられているのを見せられて良かった。お迎えの時、お母さんたちが、森公園の場所を確認し合っていた。子どもと、氷や霜柱を観察しに行くつもりなのがよく分かり、こうして、子どもたちだけでなく、親たちも環境に関心を持ち、敏感になってくれると有り難い。氷の城のような、霜柱を見せることができなかつたのはとても残念だったが。

#### みどころ

氷は冷蔵庫で作るという発想から、「冷たいところでできるかもしれない」「寒いところでできるかもしれない」という思いを持つことができ、「やってみよう」と動き出した氷作りでしたが、自然は思うような環境を作っはくれません。それでも、「近所の森公園には、氷ができる」という友達の情報は、子どもたちの興味や意欲を引き出しました。「氷は、堅くて、冷たくて、大きかった。池全部氷になっていたの」「家の裏は、とっても寒いから、氷できると思うの。だから、ママと一緒に、水入れて置いてあるんだよ」という具体的な言葉から氷作りの情報を得たことで、当然のように子どもたちの動きが変化しました。園での保育時間も環境も限られていますが、こうして家庭や地域での子どもたちの生活を取り込む工夫をすることで、子どもたちの興味も経験も広がっていくことが分かります。

また、子どもの興味や自然とかかわる姿から、保護者の環境への関心もが引き出されることで、子どもたちひとりひとりを取り巻く環境がより豊かになることが期待できる事例です。